



2010年7月28日放送

漢方医人列伝「本間棗軒」

北里大学東洋医学総合研究所 臨床研究部 部長 及川 哲郎

本間棗軒は、本邦外科史上に燦然とその名をとどめる名医です。今回は、本間棗軒についてご紹介させていただきます。

本間棗軒は1804年（文化元年）、現在の茨城県小美玉市に当たる常陸小川郷で、代々続く医家の家に生まれました。名は資章、字は和卿、通称は玄調と称し、名は後に「救」と改めています。これは、棗軒がのちに侍医を勤めた徳川斉昭が、彼の優れた技術をたたえ、多くの人命を救うという意味をもって肩衣を授けたさいに、「救」の名を贈って激励したからです。

本間家は5代玄琢をはじめとして、水戸藩の名医であった原南陽の薫陶を受けていました。そして7代目にあたる棗軒も南陽の門人でした。棗軒は17歳で江戸に出て、原南陽の門に入って医学を学びました。しかし、棗軒17歳の1820年（文政3年）8月に、南陽は68歳で亡くなっています。したがって、棗軒が南陽に師事した期間はほんのわずかであったと思われます。

また棗軒は、杉田玄白の子である杉田立卿につきオランダ医学を、太田錦城には経学を学び、修業を積んでいきました。さらに1827年（文政10年）3月25日、棗軒24歳の時には、当時外科医として天下に名をはせていた紀州の華岡青洲の門に入りました。そして

後に彼は、華岡流外科の大成者として、青洲を生涯の良師として仰ぐことになったのです。

青洲に師事すること 2 ヶ月余りにして、棗軒は長崎にも赴きました。シーボルトについて、種痘法を学ぶのが目的でした。しかし、長崎に滞留すること 2 ヶ月余り、種痘術を学びつつ、その医術を観察していた棗軒の目に映ったシーボルトの人物観は辛辣なものでした。その頃、岳父である道偉にあてた書簡のなかに「蘭医シーボルトと申す者、頗る奇妙なることも之有候えども、華岡の上に出候人物とは存じ申さず候」と記されています。

棗軒は、老大家である華岡青洲に師事した後、シーボルトのもとへ赴いたため、彼に対して碧眼紅毛の若造という感を抱いたのかもしれませんが。長崎からの帰途、棗軒は京都で高階枳園にも学び、その後再び華岡青洲を訪れていますが、ここでも「天下第一の英物と申候は華岡一人かと奉存候」と華岡青洲を称賛しています。

数年後、江戸に戻った棗軒は杉田立卿らと交わり、西洋医学を考究し、やがて日本橋に開業しました。棗軒の名声はたちまち上がり、水戸烈公德川斉昭の侍医となり、後に水戸水府城下に戻って藤坂通りに業を開いています。1843 年（天保 14 年）には、弘道館内に併設された医学館の医学教授も務め、後進の育成にも携わりました。

その間に、棗軒は多くの優れた著作を著わしています。1837 年（天保 8 年）には『瘍科秘録』十巻を著し、華岡流外科の奥秘を公開しています。

痔疾や乳癌、癰（すなわち種々のできもの）といった外科疾患のみならず、疥癬などの皮膚疾患、ノミと木槌のような器具を用いた抜歯に関する記述、さらにはインポテンツの治療法にいたるまで、棗軒の豊富な治療経験をふまえ、西洋医学すなわち外科と漢方医学すなわち内科の双方にわたって、詳しい著述がなされています。なお巻之九には、ウサギを食べることによって発症する「食菟中毒」の記載があります。これは、野菟病に関する世界で最も古い記録とされています。

また 1846 年（弘化 3 年）には、痘瘡の症状や予後、種痘の方法やその効果について述べた『種痘活人十全弁』を著し、種痘術を積極的に広めるべきであると述べています。

その後、1858 年（安政 5 年）には『続瘍科秘録』五巻を著し、そのなかで脱疽患者に対して行った下肢切断術の詳細をカラーの図入りで掲載しました。

大腿部での下肢切断術を行ったのは、棗軒が本邦初といわれています。その時用いた麻酔薬は、華岡青洲より秘法として伝えられた内服薬である麻沸湯でした。その他にも、乳癌の手術や膀胱結石摘出術、膣鏡の考案など、棗軒の創意発明するところが多くみられます。

1862 年（文久 2 年）には『内科秘録』十四巻を著し、外科のみならず、漢方の内科にも非凡の学識技能のあることを公開しています。オランダ医学を考究した棗軒らしく、解剖学についても詳しく記載し、心、肺、肝、胆、脾、腎、膀胱、精囊、胃、腸、脾、脳についてカラーの図入りで掲載しています。

巻之一では解剖のほか、診察法や総論について記載し、診察法については「望聞問切の四診に按腹（すなわち腹診）を加えて五診と為す、五診を以て病人に対して至誠を尽く

して熟察するときは、療治に臨んで大なる過ちなかるべし」と述べています。さらに、巻之二以降に疾患別の病態解説と治療に用いる処方提示、また最終巻である巻之十四では、種痘について詳細に記載しました。

棗軒の著作のうち『瘍科秘録』、『続瘍科秘録』、『内科秘録』は彼の代表作として知られています。これは華岡流外科の治療技術が初めて一般公開されたという意味でも快挙であり、医療の秘伝化打破にも一石を投じました。

華岡青洲第一の高弟として、華岡流外科を臨床治療のなかで発展させ、その大成者となった本間棗軒は、1872年（明治5年）2月8日、69歳でその生涯を閉じました。1932年（大正7年）には、従五位を贈られています。

棗軒は『内科秘録』のなかで、次のようなことを述べています。すなわち、医道の分派として古方学、後世学、西洋学、折衷学の四派があり、それぞれの長所と短所を述べています。そして、諸流派の長所を取ってひとつの流派をなすのが折衷学であり、「他流を唾棄するときものは、療治に臨んで人事を尽くすといふべからず」と、一派に偏ることを戒めています。

さらに「勤めて古籍を読み、広く衆方を採り、古方後世西洋等に出入し、其論の得失を折衷し、其の方の能否を取捨し、実用を専一として一派の巢窟に拘泥せず、療治に臨んでは一地球を一大国と定め、凡そ五大州に出る所の有能の薬物は勿論、方術論説にいたるまで撰用し、日に試み月に験し一に活人に帰するのみ」と述べ、また「薬方のごときは海外に得るといへども、或はその薬味を増減し、その服薬方法を節略し、一転して別に其の奇功を得るときは、即ち神州の医道にして異域のものに非ず」とも記しています。すなわち、たとえ他国のものであっても、それが実用に役立つ治療薬や治療法であれば、自分で用い方を改正して実践すべきであると説いているのです。

こうした著述からは、棗軒が折衷学を代表する医家として、師であった華岡青洲の「内外合一 活物究理」の精神を受け継ぎ、洋の東西を問わず良いものは積極的に取り入れ試みることを通して、新しい日本の医学を創り出していくのだ、という気概を知ることができるのではないかと思います。

ようやく最近になり日本では、西洋医学と漢方医学をはじめとした伝統医学などの長所を統合した統合医療の有用性が注目され、政府の施策としても推進されようとしています。しかし棗軒は、すでに150年近くも前からそのことを理解し日々実践していたわけですから、当時として非常に先進的な医師であったといえるでしょう。